

『伊勢物語』における散文と和歌の関係

—和歌に対する語り手の批判的言葉のユーモアについての考察—

ギユモ オリアンヌ

日本文学史上、『伊勢物語』は最も広く読まれ、注釈されてきた作品の一つであるが、まだ多くの不明なところが残っている。この点については、平安文学の専門家である高橋亨は次のように指摘している。「伊勢物語を読むたびに、その難しさに惑わされてしまう。読解な語句や、短い断章のために文脈がつかみにくいこともあるが、それは諸注釈をたよりに、自分なりに解決してみることができる。しかし、読めたと思った次の瞬間に、その全てが嘘ではないかと、ひっくり返されるような感じに襲われてしまうことが多いである」。

和歌の制限字数に合わせるための省略、修辞などに関わっている注釈の難しさに加えて、『伊勢物語』には登場人物の行動や言葉に関して語り手の批評や批判が多数見られる。

これらの語り手の言葉は理解を助けるどころか、逆にテキストを無限の解釈の領域に開いているかのように見える。本発表は、『伊勢物語』特に一〇三段での登場人物が詠んだ和歌に対する語り手の批判的な言葉に焦点を当てる。語り手は主人公が作った和歌を「さる歌のきたなげさよ」と非難している。『古今和歌集』(905年)にも収録されているこの歌は、在原業平の最高の歌のひとつとして知られており、この語り手の批判は主人公である語り手の「謙退比興」な表現として理解されてきた。しかし、在原業平の作と伝承されている『伊勢物語』の三五首のうち、この歌だけが語り手による激しい批判にさらされているということを考えると、そのような解釈は説得力に欠ける。

本発表では、『伊勢物語』百三段を通じて、どのように語り手のユーモラスな言葉が和歌のコミュニケーション空間を開き、ダイナミックで魅力的な読書体験を生み出すかを考える。

『伊勢物語』における散文と和歌との関係

—和歌に対する語り手の批判的言葉のユーモアについての考察—

お茶の水女子大学 ギュモ オリアンヌ

はじめに

『伊勢物語』は、日本の古典文学で最も読まれ、研究されている作品の一つであるが、未だに解明されていない多くの謎が残っている。この作品における解釈の難しさについて、高橋亨は以下のように指摘している。「『伊勢物語』を読むたびに、その難しさに惑わされてしまう。読解な語句や、短い断章のために文脈がつかみにくいこともあるが、それは諸注釈をたよりに、自分なりに解決してみることができる。しかし、読めたと思った次の瞬間に、その全てが嘘ではないかと、ひっくり返されるような感じに襲われてしまうことが多いである」¹。文章の簡潔さや和歌の曖昧さなどに加えて、『伊勢物語』には、語り手による登場人物の言動に対する多くの批評や批判が含まれている。語り手の言葉は理解を容易にするどころか、むしろ物語の無限の解釈の可能性を開くかのように見える。本研究では、103 段で語り手が登場人物が詠んだ和歌に対して「きたなげさよ」と述べる批判に焦点を当てる。この批判は従来、謙遜の表現とみなされてきたが、本研究ではこの語り手の批判を理解するための鍵としてユーモアの側面を探究する。このアプローチにより、『伊勢物語』における語り手の役割や、テキストの多様な読み方への理解を深めることを目指している。

1・『伊勢物語』における語り手の言葉の不透明さ

『伊勢物語』の特徴の一つは、テキスト内に語り手の強い存在である。語り手はテキスト内で登場し、登場人物の言動を批評したり、批判したりする。しかし、語り手による言葉は、明確な解釈を拒むかのように感じられる。この点について、関根慶治は「『伊勢物語』は分からない、と言おう。例えば、第七五段の末尾「世にあふことかたき女になむ」は分かるとしても、次の第七六段の末尾「(歌) とて、心にもかなしと思ひけむ、いかが思ひけむしらずかし」に、語り手や作者のどのような意図が隠されているのか、杳として分からない。第八七段の末尾「みなかびとのうたにては、あまれりや、たらずや」も、読者の判断や批評を誘い出そうとしているかのようだが、語り手や作者の意図や真意は、分かりようがない。第一〇三段の末尾「さるうたのきたなげさよ」も、語り手の批評に賛同せよと言うのか、反論せよと言うのか、そもそも語り手の批評が真剣なのか冗談なのか、さっぱり分からない。」²と述べている。『伊勢物語』における語り手の言葉はしばしば疑問形で表されることが見られる。「みなかびとのうたにては、あまれりや、たらずや」と第八七段で語り手が述べる疑問は、物語における解釈の可能性を広げる。この疑問は、「田舎人によって作られた和歌」という表現を通じて、語り手がその和歌に否定的な評価をしている可能性を示唆しつつも、その評価を明確にはせず、読者に和歌の質を自己判断させるよう促している。同様に、第七七段では「いま見ればよくもあらざりけろ。そのかみはこれやまざりけむ」という語り手の言葉が批評なのか、賛辞なのかは判断するのが難しい。

『伊勢物語』における語り手の言葉の中では、語り手がその登場人物の行動や和歌を明ら

かに批判することも見られる。第一〇三段は、「さる歌のきたなげさよ」という語り手の言葉で締めくくられている。ここで用いられる「きたなげ」という表現は、「みすばらしい」や「ぱっとしない」³といった否定的な意味を持ち、男性が詠んだ和歌の質を語り手が批判していると解釈される。しかし、この批判は一考を要する。第一〇三段の「寝ぬる夜の」歌は、905年に編纂された『古今和歌集』に収録されており、偉大な歌人である在原業平が詠んだとされる。業平は『伊勢物語』の想定される主人公であり、『三代実録』⁴では、偉大な詩人として認められている。さらに、『古今和歌集』の仮名序においても、業平は六歌仙の一人として名を連ねており、その和歌の才能は平安時代初期から知られ、評価されていた。また、『伊勢物語』に収められた業平に詠んだとされる和歌の中で、103段での和歌だけが語り手からこのように激しい批判している点も注目すべきである。この和歌は『古今和歌集』に選ばれたのは、和歌自体の価値が認められていたと思われる。このように、語り手による公然とした否定的批判と、評価される和歌との間に見られる不一致は、深い疑問を投げかける。では、この章段での語り手による批判はどのように解釈されるべきだろうか。

2・第103段における語り手の批判的言葉の解釈

『伊勢物語肖聞抄』、『伊勢物語惟清抄』、『伊勢物語闕疑抄』、『伊勢物語拾穂抄』、および『勢語臆断』といった古注釈集⁵は、これを謙遜の表現として理解している。特に『闕疑』、『拾穂』、『臆断』では、この言葉が業平自身のものと明確に位置づけ、『伊勢物語』が業平によって書かれたという前提からの解釈を示している。一方で、江戸時代に編纂された『伊勢物語童子問』は、先行する注釈書とは異なるアプローチを採っており、語り手の言葉に関して以下のように論じている。

「此哥など凡骨のおよぶ所にあらず、おもしろき也。業平の哥の中にもすぐれたる哥なり。それをわざと此物がたりの作者が「さるのきたなげさよ」といへるは還而至極誉たる詞也。(…)よく知て甚すぐれたる哥と見るから此にかぎりて「さるのきたなげさよ」といふ詞を還て作物がたりの一興としたる物と見えたり。それをしらずしてなり平の自身の卑下の詞とおもへる、いとゞかたはらいたき事どもなり。

『童子問』によれば、語り手の言葉は和歌への称賛と興味を新たにする意図を含んだ皮肉な表現と解釈される。しかし、この解釈は和歌自体に焦点を当てたものであり、以前の詞書を十分に考慮していない。『古今和歌集』恋三(644)において「寝ぬる夜の」和歌は「人に会って、翌日に読み上げた」という短い詞書が添えられているのに対し、『伊勢物語』ではこの和歌が登場人物の忠誠心を強調する場面に配置されている。

第103段の冒頭では、「むかし男」が「いとまめにじちようにて、あだなる心なかりけり」と紹介される。『日本国語大辞典』によれば、「まめ」とは「まじめであるさま。誠実でうわついたところのないさま」と解されている。『王朝語辞典』において、高橋亨は、「「まめ」の反対語は一時的で気まぐれな「あだ」に近い「色ごのみ」や「すき」の方が、より主人公性の内実を示すのも。恋物語としては当然だろうか」⁶と述べている。この解釈に基づくと、第103段の冒頭で否定形で用いられている「あだ」が、「まめ」と同義とされている。つま

り、この章段では、男主人公が3回にわたって異なる表現で「忠実な男」として評価されている。しかし、この評価は男主人公が親王方の寵愛した女性との恋愛関係に直ちに矛盾する。この関係は語り手によって「心あやまり」と評されているため、現代の注釈書は、「まめ」な男としての紹介と親王方の寵愛した女性との関係の矛盾に焦点を当てている。渡辺実「語り手としての業平が自ら卑下した言葉だ、と言われている。おそらくは、そうであろうが、「心あやまりやしたりけむ」と言う言葉といい、「親王たちの使ひ給ひける」女と関係を持ったことについての、とがめ立てのようなものを示しておきたかったのかも想像される」⁷と述べている。さらに、鈴木秀夫は「きたなげ」が人の心を対象に用いられると、よこしまだ、恥知らずだ、ぐらゐの意。ここは、歌の巧拙についてではなく、男が相手の女に歌を詠み送ることじたいを、見苦しいことだ、と評している。男の「まめにじちょう」の性格を前提しての評言でもあろう」⁸と指摘している。これにより、現代の解釈では、語り手の批判が和歌そのものよりも、「親王たちの使ひ給ひける」女との関係性を問題視していることが明らかになる。一方で、片桐洋一は古注釈に基づきつつ、新たな解釈を提案している。「『伊勢物語』の語り手をもう一人の業平とみなせば、室町時代の古注にあるように、それは謙遜の言葉である。しかし、『伊勢物語』の作者と主人公を別人とするならば、その批判は主人公に対する皮肉となる」⁹と述べている。小山真幸は「平安文学における『まめ』の研究」において、平安文学での「まめ」の用例を分析し、「男性の「まめ」さは乱れることで人々から笑われてしまうものとして描かれていた」¹⁰と、指摘しており、「まめ」という言葉がしばしば滑稽な文脈で使われていることを示している。第103段の語り手の言葉は、ユーモアの視点からも捉えられることがあり、この解釈によれば、語り手の批判は、一時的な関係に溺れ、天皇や自己への義務を怠る男性に対する嘲笑として理解できる。

語り手による男性が詠んだ和歌に対する厳しい批判が、謙遜の表現であるか、人物の行動への揶揄であるかにかかわらず、単純には受け入れられない状況は明白である。この点から、語り手の批判の深層には、和歌の質に対する疑問を提起し、物語の解釈を広げる意図があると考えられる。第一〇三段では、語り手によって表現された矛盾が数多く存在する。物語の冒頭で主人公は「まめ」、すなわち誠実で忠実な人物として強調される。しかしながら、物語が進むにつれて不適切な行動を取り、「心あやまり」と批評される。さらに、物語の末尾での和歌を「きたなげさ」とする評価は、この混乱をさらに深める。『古今和歌集』に収録されている業平の和歌を語り手が本気で「きたなげ」と評することは理解し難い。語り手の批判には、「言われたこと」と「思われたこと」の間に明確なギャップが存在する。この矛盾は、読者に和歌とその男性の行動に関して自分自身で意見を形成することを促している。

例えば、第2段での「かのまめ男、うち物語らひて、かへり来て、いかが思ひけむ」、第10段の「人の国にても、なほかかることなむやまざりけ」、第40段の「むかしの若人は、さるすける物思ひをなむしける。今のおきな、まさにしなむや」といった語り手の発言は、いずれも最終的な解釈を受け入れ難くする。語り手の発言が示す矛盾や疑問は、読者に章段の意味を自分で解釈することを求めているようだ。このようにして、語り手の発言における不透明さは、読者が参加するテキストのコミュニケーション空間を拡大する一種の遊戯的な

手法と見なすことができるだろう。

【結論】

本発表では、『伊勢物語』第103段に見られる語り手の批判を中心に、語り手の言葉の不透明さを示す例として詳細に検討した。語り手のユーモアは、在原業平が作った和歌に対する言葉の不一致を通じて顕著になり、歌集では見られない反省的な次元を物語に導入する。語り手による業平の和歌への批判は、表面上は非論理的に映るが、この非論理性が読者に新たな解釈を探究させる動機を与える。語り手の言葉における明示的な内容と暗示的な内容の巧妙な混在は、物語に新たな次元を加え、読者を積極的に巻き込むことで、ダイナミックな読書体験を提供する。

【注】

『伊勢物語』の引用は、福井貞助校注訳『新編日本古典文学全集 12 伊勢物語』（小学館、2006年）による。

¹ 高橋亨『物語文芸の表現史』名古屋大学出版会、1987、年 p.217

² 関根慶治『伊勢物語論：異化/脱構築』おうふう、2005年、p.64-65

³ 『不潔である』ということではなく、『みすばらしい』『ぱっとしない』という意」である。「きたなげなる所に、年月を経て物し給ふこと」（『竹取物語』）や「きたなげなる褶引き結びつけたる腰つき、かたくなしげなり」（『源氏物語』末摘花）のように「ぱっとしない」という訳語が最も適切である。」（片桐洋一『伊勢物語全読解』和泉書院、2013年、p.792）

⁴ 『三代実録』は業平の伝を「体貌閑麗、放縦不拘にして、略、才学無く、善く倭歌を作る」と記している。

⁵ 「卑下也」『伊勢物語肖聞抄』、「謙退ノ辞也」『伊勢物語惟清抄』、「業平の自記と見えたり。謙退比興とある心なり」『伊勢物語闕疑抄』、「玄業平の自記とみえたり。謙退興とある心也」『伊勢物語拾穂抄』、「卑下なり。自記の詞なるべし。古今集にものせれば、まことに哥のよからぬにはあらざるべし」『勢語臆断』：（古注の引用は、竹岡正男『伊勢物語全評釈』右文書院、1987年、p.1424-1428による）。

⁶ 秋山虔（編集）『王朝語辞典』東京大学出版会、2000年、p.408

⁷ 渡辺実校注『新潮日本古典集成（第2回）伊勢物語』新潮社、1976年、p.120

⁸ 鈴木日出夫『伊勢物語評解』筑摩書房、2013年、p.329

⁹ 片桐洋一『伊勢物語全読解（研究叢書442）』和泉書院、2013年、p.796

¹⁰ 小山真幸「平安文学における「まめ」の研究—「まめ」の用いられ方と意味変遷を中心に—」『東京学芸大学国語科古典文学研究室編(6)』京学芸大学国語科古典文学研究室、2013年3月、p.40